



TITLE:

陶淵明略傳：支那古今人物評傳(七)

AUTHOR(S):

村上, 嘉實

CITATION:

村上, 嘉實. 陶淵明略傳：支那古今人物評傳(七). 東洋史研究 1942, 7(6): 398-410

ISSUE DATE:

1942-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138855>

RIGHT:

陶淵明略傳

——支那古今人物評傳(七)——

村 上 嘉 實

陶淵明は彭澤の令をやめてかへつてきた。彭澤から家まで百數十支里、揚子江を溯つて鄱陽湖に入り、星子縣の西七里ばかり、廬山の麓で而も湖水に面した所に彼の家があつた。その當時上京と呼び、今は玉京山といふ。妻や子供達は、僮僕と共に家の前にとび出して、彼の舟を迎へた。八月に出て行つて、十一月にはもう歸つてきたから、僅か八十日餘りで又一緒に暮すやうになつたのである。

彼の胸には深い感慨がみち／＼てゐた。今はもうはつきり、自分の一生の態度が決つたやうな氣がする。荒れはてた自分の庭に、松と菊のみはまだ美しく残つてゐる。幼きをたづさへて部屋に入れば、すでに酒も用意されてあり隣にみちてゐる。「膝を容るゝの安ん

じ易きを審かにす」(歸去來の辭)とは、このとき彼の心の底から出てきた言葉である。

何かしら楽しい思ひが次々と、彼の胸を突いて起つてきた。このあたりの美しい景色を、くまなく跋涉して詩を作つてやらう。幼少の頃から、文章を作るといふことが、自分には一番楽しいことであつた。古人の書物を讀んで、ふと意に會するところがあれば、欣然として食を忘るといふほどであつた。

己往の諫むまじきを悟り、來者の追ふべきを知る。まことに途に迷ふ、それ未だ遠からず。今の是にして昨の非なるを覺る。(歸去來の辭)

これは元來、論語微子篇にある狂接輿の言葉としては隱遁的な意味に用ひられてゐるのであるが、當時三十歳の淵明にとりては、むしろ希望にみち／＼た言葉と

して現れてゐる。かの東臯に登りておもむろに嘯き、清流に臨みて詩を賦すといふことは、何たる樂しきことぞ。彼の前途には藝術の世界が待ちうけてゐた。

淵明が官を辭して歸つてきたといふことは、まことに我儘な行爲であるかも知れない。しかしそこに、支那と日本とは全々國情を異にしてゐることを思はなければならぬ。支那の儒家思想にありては、政治は道德に根據を置き、若し政治が道德から離れる場合には、むしろ政治を去つても道德を守るべきであるとされてゐる。それは個人において許されるのみならず、國家も亦それを認めてゐる。又當時六朝にありては、儒家思想はむしろ衰へて、老莊思想が社會を風靡してゐた。老莊思想にありては、儒家の根據とする道德そのものをも絶對否定して、超越の世界を説くものである。佛教において出家が唱へられるやうに、老莊思想にありても亦、一應現實から離れることが要求される。殊に當時國家亂離の時世にありては、隱逸の風が一種の流行とさへなつてゐたのである。

淵明はこの頃主として、老莊思想に浸つてゐた。彼は自らの性格を「質性自然なり（歸去來の辭）」といつ

てゐる。彼の藝術の奥には、いつもこの「自然」といふものがあつた。彼は詩と自然とを求めんとして歸つてきたのである。

二

陶淵明は陶侃の曾孫であつたし、その母方の祖父は西征大將軍長史孟嘉であつたから、當時門閥のやかましい時代にあつて、若し仕官を志すならばいくらでも出世の途はあつた。彼はまだ弱冠の頃州の祭酒となりたるも、吏職に堪へず少日にして解きかへり、その後州から主簿に召されても行かなかつた。彼が二十四歳のとき、會稽を中心に孫恩の亂起り、淵明は將軍劉牢之の參軍として鎮江にゆくことになつた。後に宋の武帝となつた劉裕は、この時彼の同僚として、同じ劉牢之の參軍の職にあつた。淵明が軍人になつたのは、陶侃以來の家風によるものであらうが、正史に何等彼の功績が記されてない所を見ると、やはりうまく行かなかつたらしい。それから三年目の二十六歳のとき、江陵に滞在中の母の下に歸省した冬、そこで母が喪くなつたので、彼は柩をかついで故郷の柴桑にかへり、そのまゝ三年の喪に服することになつた。

その間彼は靜かに國家社會や、又自らの人生について考へて見た。かの淝水の戦後、孝武帝は日々酣飲を事として朝政次第に頼れ、安帝の時世に至り、妖賊四方に起り、方鎮武將は却つてこれを機として、威を肆にし我慾を達せんとする有様であつた。淵明は晩年に憶ふわれ少壯のとき

樂無うしておのづから欣豫たり

猛志 四海に逸し

騫翮^{ケンカク} 遠翥^{エンショ}を思ふ^(雜詩 其五)

と詠みし如く彼の青年時代は熱情に溢れてゐた。彼は深く東晋の國家を愛した。しかし時勢の推移は、彼一箇の力を以てしては如何ともなし能はざる所であり、彼の天分はむしろ別の方面にあつた。淵明の家は陶侃以來名門の血統を引いてはゐたが、彼はその本家の出ではなく、殊に父が極めて浮世離れした性格であつた爲に、彼は幼少の頃から相當貧しい生活に育てられてきた。若し今仕官を絶つとすれば、早速生活の途に困つた。彼は十二歳にして父を喪ひ、老ひたる母と妻子を養つてゆかねばならなかつた。しかし淵明は今や深く心に期する所があつた。彼は自分の天分を伸すため

に、百姓をして生活を立てようと決心したのである。

淵明は早くから百姓をしてみたいと思つてゐたらしい。政治的な才能が無いといふわけではないが、官界の空氣といふものが、どうしても彼の性格に合はなかつた。彼は權威といふものに頭が下らない。又自分の欲しないことを人に強ひたり、人の地位を平氣で上下するといふことを好まない。その上凡て形式ばつたことが嫌ひで、表だけでもよいからうまくやつておくといふことが出来ない。彼の如きはどうしても百姓になるより外に、生き工ゆく道はない。かくて彼は、母の喪にゐてはじめて農耕に従事するやうになつた。この頃出來た詩に、

耒^スをとりて時務を歡び

かんばせを解いて農人に勸む

平疇に遠風交り

良苗 亦新しきを懷ふ

未だ歳功を量らずと雖も

即事欣ぶところ多し

といひ、そこにいひしれぬ歡びと落着きを感じた。「平疇に遠風交り。良苗 亦新しきを懷ふ」といふ句

について蘇東坡は「古の耦耕植杖の者でなければ、かゝる語をいふことは出来ない。今の世農でなければ、この語の妙を識ることはできない」といつた。淵明は初めから百姓になりきつてゐるのである。

三

淵明が歸去來の辭の初頭に、

歸りなんいざ、田園まざに蕪れなんとす。なんぞかへらざる。

といつてゐるのは、すでに田園を耕した経験があるからこそ、この言葉が出てくるのである。母の喪にゐて農耕をおぼえた淵明は、このまゝで一生を終るつもりでゐたが、その後再び出で、建威參軍となり、つゞいて彭澤の令となつたのも、やはり家の經濟が思はしくなかつたからであつた。しかし今度こそは、はつきりと自分の行く途がわかつた。如何に物質の制約を受けともなほ、人間には計り知れぬ自由な廣い世界がある。自分の天分は詩人であり、詩の奥になほ自然といふものがある。何物にも制せられず、又何物をも制せず。このゆたかな世界こそは、今後の彼の目標となつた。沛然として肺腑中より流れ出づるが如しと云はれた

た「歸去來の辭」は、彼がこゝに思ひ至つた歡びを傳へたものである。

今や彭澤より歸りし淵明は、その翌春からいそ／＼と畠の土をふみ、朝には星をいたゞいて出で、夕には月を帯びてかへるといふ精勵ぶりであつた。この時出来た詩が「園田の居にかへる」である。その中に、

暖暖たり遠人の村

依依たり墟里の煙

狗は吠ゆ深巷の中

雞は鳴く桑樹のいたゞき（歸園田居其一）

といふ句がある。支那の田舎の風景を叙したものとて、これの右に出づるものは少いだらう。彼の詩が、自然平淡にして斧鑿の痕なしといはれる所以のものはこゝにある。

淵明の詩はいつも、現實の上に作られてゐる所に興味がある。「自然」といふ深い超越をもちながら、その超越は又おのづから、勛を持ち土をふんで立つ農人の生活の上に具現されてゐる。彼が無造作に言つてゐる所の、

白日 荆扉おほひ

虛室 塵想を絶つ(歸園田居 其二)

にしても、かゝる言葉は後世詩人の常套語となつたが、彼にありては、それが本當に彼の生活であつたのである。

淵明の上京における屋敷地は十餘畝ばかり、田舎の草屋ではあるが家は八九間あつた。勿論田地は遠くに離れた所にある。後園の榆柳はいつも心地よい蔭をつくり、堂前の桃李はいゝ香りを送つた。時々草をわけて訪れてくる男がある。

相見る雑言なし

たゞ桑麻の長ずるをいふのみ(歸園田居 其二)

樸實な田舎男の顔には、つきない面白さがある。淵明はこの土地と家とを愛した。こゝで自らの藝術をみぎき、人生を掘り下げてゆくといふことは何たる幸福であるか。

今や彼は本當の百姓になつた。一切世間的なる望みを絶つて、ひたすら内なるものに向つた。彼の目の前には、日々生活の問題が迫つてくる。彼はこの勞苦と闘ひつゝ、而も一心に思索を怠らなかつた。今まで彼をとりまいてゐた甘い影も、次第にその周圍から消え

て行つた。かの歸去來の辭に見ゆる思想は、第一に美を求むる心である。藝術こそ彼の生命であつた。しかしその奥にいつも、漠然とながら、「自然」といふものを見つめてゐた。この「自然」なるものこそ、彼の藝術を根據づける所のもの——それは老莊思想による絶對否定の超越にして、その意味において宗教的なるもの——であつた。今や彼は次第にこの奥なる「自然」に近づいてきた。あの山この川を跋涉して、自由に詩を作りたいと思つた心もさめてきた。人生とは何ぞや。死とは如何に。彼は眞剣にこの問題について考へはじめた。彼は或日子供等をつれて山澤をさまよひ、そこに昔人の居を見て薪をとる男と問答をなし、「人生幻化に似たり。つひにまさに空無に歸すべし」と歎じたこともあつた。又或日出たばかりの月に照らされつゝ、鋤を荷うて家路を急いだ。道狭く草木長じて、夕の露がしとゞに彼の衣を沾した。何かしら彼は急に悲しくなつてきた。いつまで経つてもう、だつの上らぬ自分、實になさけなくなつてきた。流石に彼も一時心弱くなつて、道傍にたほれさうな氣がした。しかしすぐその後から、彼の胸の底に強い平生の志が立上つて

きた。

衣のうるほふは惜しむに足らず

たゞ願ひをして違ふことなからしめん(歸園田居 其三)

われ／＼はこゝに精進三昧の淵明を見る。

四

菊を採る東籬の下

悠然として南山を見る(飲酒 其五)

菊を採つて伸び上つた途端に、美しく南山が目に見え、
たゞ。全く思ひがけないこの景色を、悠然として、たゞ

我を忘れて見入つてゐた。

秋菊 佳色あり

露をあつめてその英をとる

汎としてこれ忘憂のもの

わが遺世の情を遠ざく

一觴ひとり進むと雖も

杯つきて壺おのづから傾く

日入りて群動やみ

歸鳥 林におもむきて鳴く

嘯傲す東軒のもと

いさゝかまたこの生を得たり(飲酒 其七)

秋菊佳色ありの一語、古今塵俗の氣を洗盡すといはれた。菊の妙をつくして餘りありといふべし。

この時淵明は三十九歳の秋、その詩才は遺憾なく發揮されて、まことに菊花の如くその馥郁たる香りを放ちつゝあつた。淵明は時々自分自身を忘れてゐる。没我の境地に入つてゐるから、かういふよい句が生れるのであらう。平淡にして自然、古人が斧鑿の痕なしと評した神韻。それにしても如何にして彼は、かゝる没我の境地に入ることが出来たのであるか。

園田に歸してより以來、藝術より次第に宗教の世界に入つて行つた淵明は、この頃になつて再び強く現實の世界に降り立つてきた。彼はどうしてもこの現實を逃れることが出来なかつた。かの山谷の士は、世を捨て人に反いて鳥獸の中に入つて行つた。彼等は徒らに漢代以來の禮教の形骸を抱き、それより次第に老莊に入り或は佛教に歸して、たゞ獨善的な超越を守らうとした。しかし如何に獨善的な超越に止らうとも、依然としてそれは現實の中の一部である。淵明は初めて外と内との對立に悩み、外なるもの世間的なるものを捨て、内に入つた。内に入るといふことは、この現實の

底を極めることであつた。外と内との對立は、内そのものの、中にある矛盾に源を發してゐる。この矛盾を解決しない限り、どこの世界、何處の果に逃れようとも決して眞の超越は得られない。儒家思想は元來人間の倫理を追求するもの、孔子の晩年はそこに著目された。若し人々がこの點に思ひを致したならば、徒らに禮教の形骸を抱いて山谷に逃れる必要はなかつた。淵明は老莊に養はれると共に、又幼時より儒家思想を有つてゐた。彼が現實を逃れることが出来なかつたのはこの倫理への要求が然らしめたのである。

丁度この頃、しきりに淵明に出仕をすゝむる人々がゐた。宋書の本傳によると、晋の義熙末年に、淵明は著作佐郎に徴されたけれども斷つたといふ記事が見える。時に劉裕はすでに國政を執りて威をほしいまゝにし、嘗ては劉裕と功を共にした者で、後で夷滅の難に逢ふものも少からざる有様であつた。淵明の節義は、苦しさに堪へて愈々強く鋭く起つてきた。彼は自らの氣節を、清風(道)を待つ蕭艾中の幽蘭にたとへ、或は日暮孤生の松を求めて鳴く失群の鳥にたとへた。

固窮の節に頼らずんば

百世當に誰にか傳へん(飲酒 其二)

とは彼がこの時言ひ放つた言葉である。これより數年後、義熙十四年劉裕は遂に晋の安帝を弑し、ついで立てた恭帝の位を篡つて晋室を滅し、自ら立つて宋の武帝となつた。劉裕は一代の英傑であつた。けれども淵明には又おのづから淵明の立場があつた。この時淵明の悲憤が如何に燃え立つたかは、「荊軻を詠ず」の詩、ほか數首の詩篇について見られるところ、すでに晋室の祿を辭してより十數年、躬耕卑賤の身にある淵明がなほこの烈々たる氣節を有すること、かの後漢末氣節の士の遺風の流れてこゝにあるを見るのである。

その上、彼の生活はこの頃になつて非常に苦しくなつてきた。人々の出仕のすゝめを斷るについて、彼の心の中に深い苦悶が起つてゐたことは、飲酒の詩に明かに見られるところである。けれども彼の平生の志はつひにこの最後の誘惑にも打克つて了。彼の藝術はこの田園の中でなければ達成できないものがあつた。彼の藝術は深く人生に根ざし、彼の人生は常に「自然」に基づいてゐた。彼が苦悶に陥るとき、いつも彼を慰めてくれるものは、古人の氣高い姿であつた。一簞の

食、一瓢の飲、陋巷にありてなほその樂しみを改めざる顔回の如きもあつたのである。

淵明は官を辭したけれども、決して現實を逃れたのではない。彼は内なるものに入ることによつて、却つて現實の深味に達したのである。即ち淵明は今四十歳前後において、強い倫理への要求と、貧困の試練と、而して又時局に對する悲憤の激情とにより、生々しく現實の矛盾の中に降り立つてゐたのである。

われ／＼はいつも明日に對する希望の下に生きてゐる。しかし現實の深味に降り立つ人は、その底が愈々深く愈々遠きに慄然としてをのゝかすにはをられない。淵明は時々「わが生夢幻の間。何事か塵囂にづながれん」(飲酒其八)といふやうな言を發した。それはこの現實を逃れた人の言葉ではなくして、こゝから脱することの出来ない人の苦叫である。すでにこの現實にある深い矛盾の奥に達した人は、その時自己といふものが滅却されるのである。自己の滅却は没我であり、それが即ち無であり自然である。淵明は一度深く現實の矛盾に達し、その矛盾の中から光を見出した。飲酒の詩に見る彼の没我の詩境は、即ちこの矛盾の沼に咲

いた純白の華であつたのである。

五

淵明は菊を愛した。九月九日秋菊園に盈ち、うららかな陽が隅々にまですき通つてゐる。往く燕は遺影なく、来る雁に餘聲あり。酒よく百慮をはらふといふにあいにく爵には塵ばかり。されど、小人さへものを思ふ秋の日に、盡きざるものは人の心である。

世短意常多

とは淵明が「九日閑居」の詩に詠じた所、古詩に「人生不滿百。常懷千歲憂」とあれど、淵明は僅か五字を以てこれをいひつくした。襟をさめて獨り閑かに謡へば、緬焉として深情を起す。淵明にはいつも、この深い情が湛へてゐる。彼が親友を思ふの詩「停雲」において叙べたところも亦この情であつた。彼の情は純であり眞であつた。時に激昂してはかの「荊軻を詠ず」の詩に見る如き、忠節勇武の言となり、或は歸去來の辭の「親戚の情話を悦ぶ」といふやさしい心ともなつた。或は「程氏妹を祭るの文」や「從弟敬遠を祭るの文」に見る如き、惻愴として人を悲しましむるの文となり、時には又陶然として自ら樂しむの情ともなつ

た。

淵明が酒を愛したのも、やはりこの深き情が要求したのであつた。彼の詩にほとんど、酒の出でこない詩はないといつてよい。それほど頻繁に出てくる酒が少しも目障りにならないほど、彼にありては酒そのものが美化されてゐる。彼は家にいつも酒があるといふわけではないので、親戚故舊のものが彼を招待すると、行つて心ゆくまで飲んだ。そして酔がまはると又いつでも歸りたい時にかへつた。その間に少しも、自分の氣持を曲げるといふことをしなかつた。彼の理想社會は、情を天真爛漫に伸すことの出来る社會であつた。彼はその當時の一般の思想に従つて、かゝる社會が古代に行はれてゐたものと信じてゐた。

道うしなはれて千載になん／＼とす

人人その情を惜しむ

酒あり 肯へて飲まず

たゞ世間の名を顧りみる。(飲酒 其三)

と。又彼が若い時代に書いた「桃花源記」は、老子の小國寡民たがひに相往來しないといふ思想に基づき、同時に情に偽りなき淳朴の社會を描いたものである。

淵明は一箇の農人であり、その生活は苦しく勞働はげしかつた。従つてその酒は多く勞苦の後の酒であり、或は村人を集めて長吟し、或は簷下に息ひて襟顏を散するていのものであつた。彼に「勸農」の詩がある。上古淳朴の風より説きおこし、舜も禹も躬耕し、長沮・桀溺も耦耕せるを述べ、民生は勤にあり、若し裾を曳き手を拱いて徒食するものあらば、誠に許しがたき罪人なりとなす、彼は決して有閑詩人ではなかつた。しかしそれにも拘らず、この詩人の心には、一度酔へば陶然として百年の憂を忘れ、しばらく今朝の樂しみを極めんといふ、一種の享樂主義的傾向のたゞよへるを否定することは出来ない。

思ふに漢代を支配した儒家的禮教主義が、その政權の衰微と共に次第に形式化してきたとき、これに代つて魏晉の社會を風靡したものは、むしろ情の解放であつた。竹林七賢達は、恰もその過渡期の產物として現れた。情の解放は時勢の混亂と相まち、反動的に曠達自恣の享樂的傾向を捲き起したが、一面においては又清新澹刺たる文學美術の勃興をも促した。彼の現れた時代は、一方において五胡十六國の侵入があり、それ

に伴つて佛教思想の流入があつた。漢帝國の滅亡以來、すでに二百年を経過してなほ強固なる政權の樹立を見ず、思想的に又民族的に、最も大規模なる轉換が行はれつゝあつた。彼の心に新舊様々の思想が混入せるも亦時代の反映でなければならぬ。

彼の思想は老莊の自然による超越にあり、而もそれは儒家的倫理を通しての絶對であつた。彼には後漢末氣節の士の遺風があり、一面においては又六朝の情緒主義的傾向があつた。一方に貴族趣味の現れあると共に、他面に素朴なる農耕人の心情があり、高節菊の如き香りあると共に、陶然として酒を愛するの情があつた。こゝら複雑なる諸要素も、彼の自然なる超越において、ことごとくが統一されてゐた。その矛盾は却つて彼の超越を深くし、遂には佛教の影響をも受けて死への自覺がなされると共に、そこから出で、現實を美化する藝術の花を咲かさしめたのである。

六

前々から淵明は南村に住んでみたいと思つてゐた。

南村といふのは尋陽(今の九江)郊外の地で、尋陽は揚子江に臨み、交通の要衝であるのみならず又江州の治

としてこの地方政治の中心でもあつた。彼は上京に六年住んだ後、義熙六年三十五歳の年に、この南村に引越した。淵明といふ人は、柴桑(九江西南九十支里の楚城郷)の田舎から廬山の麓の上京に來り、今また尋陽の郊外に移つてきたのは、年をとるにつれて次第に都に出てきたわけで、そこにも普通の隱逸家と非常に違ふ所がある。淵明は遂にこの南村で死んだのである。

淵明が南村を選んだのは、第一に殷景仁が住んでゐたからであり、殷景仁は當時晋安南府長史掾として尋陽に居たのであるが、その率直にして飾氣のない性格が嬉しかつた。その外尋陽に行けば、色々珍しい人に逢ふ機會が多かつた。淵明の爲に弔文を書いた顔延之は、義熙十一年の頃劉柳後軍功曹として、しばらく淵明のすぐ近くに暮してゐた。その後顔延之は諸方に轉じたが、宋の元嘉元年始安郡の太守となつて尋陽を経過した時も、わざわざ淵明を訪れてゐる。早く廬山東林寺の慧遠の下に蓮社を結んで教界を風靡した周續之は、やはり淵明の親友で、義熙十二年の頃山を下りて尋陽に來てゐた。羊長史が秦川に使用して尋陽を過りし

時、淵明は彼に詩を與へてゐる。龐參軍は殊に淵明の崇拜者で、嘗て近くに暮したこともあり、屢々親交を厚くしてゐる。江州刺史王宏の如き、淵明に近づかうとして色々苦心してゐたことは逸話にまで残つてゐる。

南村の家は上京の時に比べると、都會の郊外だけに大分狭苦しい。けれども此等の知人が時々來り、相與に時勢を談じ、文章を考究賞翫するといふことは、やはり田舎に居つては味へない楽しみである。附近の貧しい人々の中にも、色々面白い人が居た。氣候がよくないと、或は高きに登つて新詩を賦し、互に門を過ぎては遠慮なく相呼ぶ。酒あらばこれを斟酌し、農務には各々歸して働く。全く胸襟を開いて交る氣持といふものは、素朴を愛する人々の喜びである。「聞く素心の人多しと」(移居)は、淵明が南村に移るときの言葉である。

南村に移つてから十二三年の歲月がすぎ去つた。淵明は久しぶりになつかしい上京の地を訪れた。嘗て歸去來の辭を賦しかへり、今のやうな農耕の生活に踏出したのも、みなこの上京に居る時のことであつた。

阡陌 舊を移さず

邑屋あるひは時に非なり

履歴して故居をめぐる

隣老まれにまた遣る

歩歩 往迹をたづぬ

處あり 特に依依たり(還舊居)

この時淵明は四十七八歳、最早晩年に近い年であつた。彼はいよ／＼年を加へ、いよ／＼貧しくなつてゐた。しかし彼の人生は深さを増し、彼の藝術は光つてゐた。

七

淵明の健康はあまりすぐれた方ではなかつた。彼が三十六歳の作「責子」の中には、「白髮兩鬢に被り。肌膚また實たず」と見え、彼が早くから白髮になつてゐたことは有名である。尤も顔回は二十九歳のときすでに白髮になつてゐたといふ。淵明は四十歳前後によく「形骸久しくすでに化す」といふ言葉を使つてゐる。

四十八歳の作「龐參軍に答ふ」の中に「われ疾を抱くこと多年、また文をつくらず。本より豊かならず、また老病これにつぐ」といつてゐるのを見ると、彼は

つも持病に悩んでゐたらしく、五十近くになると、餘程状態が悪くなつてきたやうである。「本より豊かならず」といふのは、元來が瘦形のあまり丈夫ならざる

質であつたのである。彼に「止酒」といふ詩があり、暮に止むれば寝ぬるに安んぜず、晨に止むれば起つ能はずといふまでに好きであつた酒を、一時ぶつくり止めてしまつたことがあつたが、それもこの頃の作かも知れない。彼が飲酒の度を過したことは、元來強い方でなかつた體質を一層悪くしたであらうが、彼の生活が過勞に陥つたことも亦その一因である。彼は三十以後はほとんど休みなしに働きつゞけたのであるが、その三十五歳當時の作に、山中は霜露おほく、風氣も亦先づ寒くなるものを、

田家あに苦しからざらん

この難を辭するを得ず

四體まことに乃ち疲る

庶幾くは異患の干すなからんことを

(庚戌歲九月中
於西田穫早稻)

といつてゐる。彼が死に近づいた頃子供等に言ひ遺した言葉には「疾患以來やうやく衰損に就く。親舊遺せず、つねに藥石を以て救はる。自ら恐る大分將に限り

あらんとす」とある。彼は遂に五十二歳でこの世を去つた。

彼の晩年は實に哀れなものであつた。彼は弱冠にして娶つたばかりの妻を喪ひ、後妻の翟氏も亦四人の子供を遺して、彼に先んじて逝つた。彼は十二歳にして父と別れ、二十六歳のとき最愛の母もなくなつた。彼が幼少の頃よりそのタレガミを撫していとほしみしたつた一人の妹は、程氏に嫁して間もなく未だ若くしてこの世を去つた。彼の仕事の唯一の手助けなりし従弟の敬遠は、彼が三十六歳の時にすでに死んでしまつた。彼は前妻の腹に出來た長男の儼をはじめ、五人の腹違ひの子供を抱えて絶えず生活の爲に働かねばならなかつた。五人の子供は彼に似ず、何れも無能であつた。けれども彼はその子供達を慈しむこと誰よりも篤く、彼の最も楽しい時は、子供等が側で戯れるのを見つゝ、家に居て酒を飲むときであつた。

彼の百姓ぶりも思はしからず、風雨縱横に至り、田虫に襲はれることも屢々であつた。彼が四十三歳のとき遇つた火事は、彼の乏しい家財を丸焼けにしてしま

つた。彼の貧困は年と共に迫つてきた。彼の晩年の作「雜詩」の中には、その苦しい生活が如實に現はされてゐる。

日々田桑に勵めども、衣食乏しくつねに糟糠をなむ。満腹を願ふにはあらねど、せめて粳^{ウルシネ}糲^{シネ}に飽かんと思ふ。冬をふせぐに大布にて足り、夏は葛布の粗なるにてよし。しかるをなほかく得る能はず。あはれなるかな、また傷むべし。(雜詩其八)

と。彼は夏日に長く飢を抱き、寒夜に被なくして眠ることも屢々あつた。彼に「乞食」の詩あるもまた宜なるかなである。彼は五十歳にして遠く家を離れ、何人かの爲に雇傭されて働いてゐた形跡がある。

彼は詩人であるだけに、人生苦といふものに對しては何人よりも敏感であつた。彼は苦しみを苦しみとして見た。

壑舟 須臾なく

我を引いて住るを得ず

前途まさに幾ばくぞ

止泊の處を知らず

古人寸陰を惜しむ

これを念ふ人をして懼れしむ(雜詩其五)

苦しみに引き廻されて止まる處を知らないとは、實に悲痛なる言葉である。彼はこの苦しみの中にあつて、なほ絶えず寸陰を惜しんで道に勵んだ。彼はこの現實の底に徹して、その中に大なる安心^{アッセン}を得たのである。

彼の臨終は近づいた。彼は既に早くからそのことを悟つてゐた。彼は「子儼等に與ふるの疏」といふ遺言狀を書いた。人の子を思ふ親の情は、千載の後なほ深くわれ等の胸を打つものがある。彼は自らの柩を引く爲の「挽歌に擬するの辭」を書き、最後に「自ら祭るの文」を書いた。親友顔延之がその誄の中に「化を視ること歸するが如く」といへるやうに、今やこの大詩人は、陋屋の中に横りて靜かに最後の眼を閉ぢたのである。

参考文献

李公煥、箋註陶淵明集

古層冰、陶靖節年譜